

お世話になる先生に診察を受けたのです。東京で健診を受けていた時には逆子のことは何も言われたことはありませんし、初めて超音波で見ると赤ちゃんの姿に、はしゃぐような気持ちで診察台に横になっていました。それが「逆さまだ」というお医者様のひと言で暗い気持ちになってしまったのです。何の根拠もなかったのですが、自分のおなかの子は絶対に逆子になるわけがないと決めつけていましたので心の準備もありませんでした。また、陣痛促進剤等の薬を使うことなく自然分娩で産みたい、出産後すぐに胸に抱いて乳をふくませたい、入院中も母子同室で過ごしたい、という様々な希望がかなえられないのではないかと、という不安に駆られたのです。逆子がおおるといふ姿勢（逆子体操）を教わって帰って来ました。

東京に戻り、早速逆子体操をしました。あまりに苦しくて、十五分続けるように、という所、三分程で悲鳴をあげてしまいました。隣で見ていた夫は

「痛いことはやめた方がいい。赤ちゃんも苦しいよ」と忠告してくれましたが、あと一分でも二分でも頑張ろうとその姿勢を保ちました。もう続けられない、止めようと思った時は肩の痛みと情けなさい、涙が出てきました。落ち着いてから考えると確かに私が痛いことは赤ちゃんにも良いことはない、逆子体操はもうやりませんでした。四日後、東京の病院で戻っている（逆子ではない）と言われた時は身も心も軽やかで妊婦なのにもかかわらずスキップをして帰る程でした。

それから東京の病院では逆子と言われることなく、里帰りする三日前の健診でも、頭は下にあるということでした。

二、再び逆子と言われてから

予定日の五週間前に里帰りし、診察を受けました。「逆子はどうかな」と聞かれた時は、東京の病院では、頭は下にあり逆子に戻ることはないと言わ

れていたので自信があったのに、お医者様からは「なおっていない」と意外な返事。初めて言われた時よりはショックも少なく「きつとなおります」と元気に宣言したのですが、「奇蹟が起これば」と言われてしまい、しょんぼりと帰りました。

東京の病院で逆子はなおっていると言われていましたが、その時もしかしたら逆子のままだったのかもかもしれないと思ったり、超音波が嫌で、その度にいたずらのつもりでひっくり返るのかしら、と非現実的にことを考えたりもしました。しかしどうして逆子なのかは全く意味がないことにすぐ気づき、戻ることを信じることにしました。

その晩からは入浴の際「ボンボコ（赤ちゃんの当時の呼び名）はさかさまなのよ。クルッとひっくり返ってね。その方が楽に出てこられるから。」と必ず話すようになりました。また苦しかった逆子体操ももう一度指導を受け真面目にやることにしました。

逆子をなおそうと努力する一方で、おなかの赤

ちゃんの居心地も考えるようになっていました。私はずわりを和らげるお灸をし、それが収まってからは安産の為のお灸を続けていました。安産の為のお灸は逆子をなおすのにも有効だと聞いていました。そのお灸をしているのにもかかわらず逆子だということは、よほどさかさまの姿勢が居心地が良いものなのであろう、それならそんなに神経質になるのはやめようと思ったのです。

一週間後の健診では、赤ちゃんの足が私の骨盤に入っているので、きつと逆子はなおらないこと、そして帝王切開にするかどうかの話がありました。

その病院では逆子だという理由だけで帝王切開にはしないが、ある特定の障害を持った子どもの出生時の状況を調べてみると、逆子で自然分娩した場合の方が、逆子でなくて自然分娩した場合に比べ、はるかに確率が高くなっているのです。逆子なら絶対に帝王切開にすることを勧める小児科医が多い、と説明されました。そして、次の週までに帝王切開にす

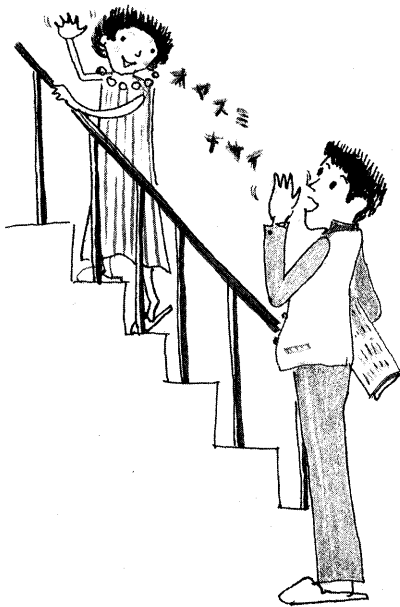
るかどうか自分で決めるように告げられたのです。帰り道、また涙が出てきました。居心地がいいならそれでいい、などのんびりしてはいられなくなりました。そして自分で決めなくてはならない。私のそれまでの人生の中で一番重大な選択にも思えました。

二時間位は迷ったり泣きそうになったりしましたが、分娩台にあがってから逆子がなおることもある。そして私の願いを赤ちゃんは聞き入れてくれると信じ、帝王切開は拒むことにしました。

帝王切開に抵抗があったのは、産道を通るとき皮膚刺激が赤ちゃんにとってとても大切だと思っていたことと、赤ちゃんは自分が出てきた時に生まれてくると信じていたためです。

自分では、はっきりと決めたつもりでいましたが、両親と話をしているうちにまた迷い始めました。夫に連絡をとった所、産婦人科医の親友に相談してくれました。逆子の場合が一番大きな頭が最後

に出るためへその緒がひっかかると呼吸ができなくなり障害をもつことになるという説明があり、その上で分娩監視装置をつけ、赤ちゃんの様子が少しでもおかしかったらその時は切った方がよい、という



アドバイスだったそうで、私もそれに納得し、覚悟もできてぐっすり眠ることができました。

いつまでも、赤ちゃんがおなかの中にいてずっと一緒だったらいいと思っていた私でしたが、この日初めて赤ちゃんは出てくるということを実感し、またお医者様が産ませてくれるのではなく、私が産むということを変更して確認させられたような気がしていました。そして、子どもを信頼し、尊重することは、生まれた後のことかと思っていたのが、おなかの中にいる時から始まっていることも意識し、どんな状態でも、誇りと自信をもって産もうと強く思ったのでした。

三、出てくるまでの日々

赤ちゃんの頭がなるべく小さいうちに生まれるように、お医者様からは、床みがぎと歩くことを命じられました。歩くのも坂道が有効で、特に階段を登って坂を降りるとよいとのことでしたので、買物

へ行くのも坂のある道を通るように遠回りしたり、階段を探し回ったりしました。一番効率が良いのは階段と坂の両方がある近くの高校でした。一周するのに約五分かかる道を十回位歩いていました。学校ですので昼間は人目も多く毎朝早く起きて歩いていました。普段なら無駄だと思ふこともこの時は大きな意味があることでしたし、赤ちゃんが出やすくなるためでしたから、とても充実した時間でした。

自分では努力していたつもりでしたが、おなかが増ってくることもなく、お医者様には進歩がないと言われる位でした。今日生まれいもいい、とも言われましたが、スキップができる程、生まれてくる気配は全く感じられませんでした。

予定日の一週間前に、お医者様から予定日までしか待てないと言われてからは、神経が過敏になり、母の「もうすぐ生まれるわね」という言葉にも素直に喜ぶことができず、八当たりして涙ぐんでしまったり、心掛けが悪かったためかもしれないと自分を

責めたりしていました。十分に納得しているつもりなのに、出産に関する本の逆子の欄を読みあさり、少しでも安心できる材料を探したりもしていました。

予定日。いつもは午前中に診察を受けていましたが、おなかの中の子が少しでも出る気になってくれればいいとわずかな希望を持ち、午後になってから病院へ出かけました。この小さな抵抗が功を奏したのか、三日間の猶予を与えられ、朝九時に来るように注意もされて帰宅しました。

待てない、というお医者様の言葉で、何らかの薬を使うことは私にも想像できていました。帝王切開にするかどうか決める時に相談した産婦人科医の友人からは使い方を間違わない限り、母体で作り出すのと同じ物質だから心配ないと言われていましたが、それでもできたら使うことは避けたかったので。三日間の猶予は与えられましたが、三日間のうちに陣痛が来ることに自信が持てず、素直に喜ぶこ

とはできませんでした。

そして、三日後、入院の用意をし、夫と共に病院へ行きました。内診を受け、分娩監視装置で子宮の収縮の様子を見た結果、この日もまた三日後に来るようにと言われ帰されました。

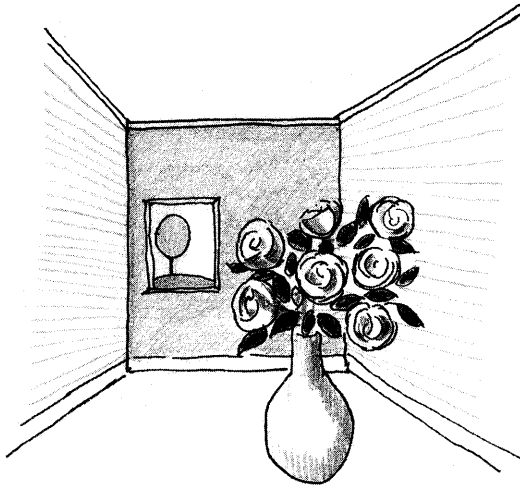
拍子抜けしてしまいました。気持ちの動揺はありませんでした。覚悟ができたのです。男の子、女の子、それぞれの名前を最終的に決め、お墓参りもしました。朝の階段登りと坂下り、安産のお灸も続けました。前日には電車を乗り継いで三時間程かかる所から鍼灸師の資格を持つ叔母が突然来て、逆子をなおすお灸をしてくれました。

当日の様子はビデオで撮ってあるのですが、病院にはいるまではにこにこ笑顔なのが、待合室では緊張のために引きつった表情をしているのがよくわかります。

点滴で薬を落とした途端陣痛が始まりました。陣痛の最中は逆子のことを忘れ、分娩台の上でいきん

でいる時は、あまりの痛みに、帝王切開にしても
らってもよかったなどといい加減なことを思ってい
ました。

そして、点滴を始めて約五時間後、娘はお尻から



出てきました。夫と私の母が目を見赤にして分娩室
に入ってきました。後で聞くと、二人は産声を聞いた
途端抱き合って泣いていたということでした。私
は、と言えばお尻から出てきたのならすぐに女の子
だとわかったのに、全部出てから教えるものなの
だ、と思ったり、もう階段登りをしなくてもいいと
ホッとしていました。すぐに胸にのせて乳を含ませ
ることもできました。無事に産まれてきたことは勿
論嬉しいことでしたが、涙は出ませんでした。これ
から一緒に生きていこうね、と声をかけたくなるよ
うな喜びでした。そして逆子だったことも忘れてし
まっていました。

四、その後の育児の中で

お尻から先に出てきたために娘のお尻は皮がむけ
赤くなっていました。退院しても傷が治るまでは、
おむつ替えのたびに消毒し、ガーゼもあてなおして
いました。そのたびに逆子で産まれてきたことを確

認していたわけですが、暗い気持ちにはなりません
でした。それがしばらくしてベビー雑誌の投稿など
で、いかに自分が楽なお産だったかという文章や、
自然分娩の素晴らしさを唱った記事などを見ると、
自分が足りなかったのではないかという寂
しい気持ちがするようになっていました。また安産
だったかと尋ねられると、必ず逆子だったことから
話し始めていました。その裏には頭から生まれな
かったことがいけないことのように思ってしまう自
分がいました。娘との生活の中で逆子のことでも心
沈むのはほんのわずかな時間でしたが、こだわりを
持っているのは確かでした。

そして最近になって、私と同じように逆子のまま
予定日まで数日になった友人から相談の電話をもら
いました。お医者様に、きつと大丈夫だけれど危険
が全くないわけではないので帝王切開にすることも
考える。どうするか決めなさいと言われた。自分で
は帝王切開にしたくないけれど、夫の実家のご近所

で、逆子で帝王切開をしなかったために出産の時に
トラブルがあった方がある。きつと夫の両親は帝王
切開を勧める。その前に自分でよく考えたいから私
の話を聞きたいとのことでした。私は彼女にどちら
がいい、とは言えませんでした。本当にわからない
かったです。「辛くて悲しいけれどお母さんにとっ
こにこしていようね。悲しむことは赤ちゃんにとっ
ては自分の今の存在を受け入れてもらっていないこ
とになるもの。それは帝王切開によって失われるい
ろいろなことよりも、ずっとかわいそうなことかも
しれない。私はできなかつたから、本当にそう思
う。私はこう話していて自分が娘を悲しませてい
たことにやっと気付きました。母親が不安になると
いい血液がおなかの赤ちゃんに行かなくなるものが
いけない、としか考えていなかったこともはつきり
しました。

この友人からの電話のお蔭で、私は自分の出産を
見直すことができました。逆子で生まれてきたこと

を思って気持ちが落ち込んでいたのは、逆子がなお

らなかつたことを悪いととらえていたからでした。

娘を受け入れていなかったことに気づくと、自分の
気持ちが落ち込む、と言って自分を守ることはあま
り意味がないと考えられるようになりました。思い
をかけるべき相手は娘です。私は娘に何度か謝って
います。謝ろうと決めているのでもなく、義務だとも
思っていないですが、謝らないではいられないので
す。

謝るようになってからは私は逆子のことでは落ち込
むこともなくなりました。逆子だった頃の自分も以
前より暖かく見られるようになり、全般的には娘を
受け入れていたと思うようになっています。

それから、私は生命の誕生の素晴らしさを忘れか
けていることに気づきました。赤ちゃんの育ちがよ
り順調になるために一番良いお産というものがある
かもしれませんが、形はどうであつても、生まれて
くるだけで十分価値のあることを改めて感じていま

す。

『子どもと一緒にいることが何よりも嬉しい』と
いう言葉が、より深い意味を持ったよう嬉しい毎
日です。